

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00886

研究課題名（和文）小中連携を図るための中学入門期における診断用英語語彙テストの開発

研究課題名（英文）Development of a Diagnostic English Vocabulary Test for the Students who just Entered Junior High School in Japan

研究代表者

星野 由子（Hoshino, Yuko）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：80548735

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では小学校卒業時、もしくは中学校入学時に子供たちの英語力を簡単に測定できる英語語彙テストの開発を行った。まず、現在小学校で使用されている英語教科書を全てコーパス化し、7社すべてで使われている語彙を選出した。その後、中学校1年生で使用されている教科書にもこれらの語彙が表れているのかどうかを確認し、小学校で高頻度で使用され、かつ中学校でも使用されている69語を目標語とした。これらの単語について、イラストを作成し、イラストがその単語を簡潔に表しているのかどうかを2名で確認し、単語の音声聞いて正しいイラストを選ぶテストを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

令和2年度から小学校で外国語科が教科化し、令和3年度末に初めて小学校5、6年生の2年間外国語科を履修した児童が卒業した。まだ小学校高学年の2年間外国語科を受けた子供たちがどの程度の英語力をつけて卒業しているのかは定かではない。本研究で開発したテストを使用することによって、小学校の2年間でどの程度の語彙力をつけて卒業しているのかという指標を示すことができる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed an English vocabulary test that can easily measure children's English proficiency when they graduate from elementary school or enter junior high school. First, we created a corpus of all English textbooks currently used in elementary schools and selected vocabulary used in all seven companies. We then checked whether these vocabulary words were also represented in textbooks used in the first year of junior high school, and selected 69 target words that were used frequently in elementary school and also used in junior high school. For each of these words, an illustration was created, two students checked whether the illustration briefly represented the word, and a test was created to select the correct illustration by listening to the audio of the word.

Translated with [www.DeepL.com/Translator](http://www.DeepL.com/Translator) (free version)

研究分野：外国語教育

キーワード：小学校 語彙 テスト

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

平成 29 年度告示の学習指導要領(以後、新学習指導要領)において、小学 3、4 年生で外国語活動、そして小学 5、6 年生で教科としての外国語科が開始されることとなった。2018~2019 年度は移行期間であり、2020 年度から全面的に新学習指導要領が施行され、日本全国の小学 5、6 年生が英語を教科として学習することとなる。これまでは本格的な英語学習は中学校から始まっていたが、英語学習が小学校から始まることによって小中連携の問題がより顕在化してくると考えられる。そして、小中連携の問題は特に語彙において顕著になるであろう。なぜなら、外国語活動や外国語科での語彙は、選定の基準が他の科目や外国語科での文法よりも曖昧であるためである。

例えば、新学習指導要領において、どのような文法項目を扱うべきかが明確に記載されている。一例として、小学校では助動詞の can(「能力」を表す場合のみ)を扱い、中学校では can の「許可」や「依頼」といった意味も学ぶとされており、小中の連携が取りやすくなっている。その一方で、語彙については小学校の学習指導要領では 600 から 700 語程度の語と記載され、中学校では小学校での語彙に加えて 1600 から 1800 語を学ぶという記載があるのみである。したがって、どのような語を小学校や中学校で学ぶかについては定められておらず、これが小中連携を阻む要因になると予測される。そのため、小学校、中学校の教科書で使用される語彙の特性を明らかにし、小学校と中学校との間での語彙の接続を行うことが重要となる。

また、新学習指導要領では小学 5、6 年生において「読むこと」「書くこと」が含まれることとなり、この 2 技能については慣れ親しむことが目標とされている。そのため、必ずしも児童の中に定着しているとは限らない。新学習指導要領では、小・中・高等学校で一貫した目標を実現することが掲げられ、学校段階間のつながりがより一層重視されることとなっているため、語彙やタスクにおいても小中連携を行うことは喫緊の課題である。中学校の入門期に行うテストでは、小学校で実際に児童が行ってきたタスク形式を踏まえ、慎重に検討すべきである。

そこで本研究では特に中学入門期に焦点を当て、小中連携をよりスムーズにするための診断用英語語彙テストを作成する。新学習指導要領に基づいて作成された教科書に焦点を当て、小学校と中学校でどのような語彙が扱われており、どの程度重複があるのかを調査する(1~2 年目)。また、児童・生徒にとってより親しみのある形式でテストを実施するため、教科書で使われているタスクについても調べる(1~2 年目)。このデータを基に語彙とタスクを選定し、語彙テストを作成し(3 年目)、実際に実施して信頼性・妥当性・実用性を検証する(4 年目)。中学入門期に焦点を当てるのは、中学校には複数の小学校から生徒が入学する場合も多く、その際に学校間での外国語学習への取り組みの違いが中学入学時点での生徒の英語力に影響を与える可能性があるため、また児童の発達や家庭環境は一様ではなく、同じ小学校から進学した生徒間であっても、英語力には個人差が大きいと考えられるためである。このような違いを中学校英語教員や中学校が独自に調べることは負担と考えられるため、中学入門期に小中連携を図る助けとなる方法を検討する必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、小中連携を図るための中学入門期における診断用英語語彙テストを開発することである。2009 年の現行の学習指導要領の移行期間以降、小学校では外国語活動のみを行ってきたため児童は英語へ慣れ親しんではいるが、本格的に英語の知識を学ぶのは中学校からであった。しかし、2020 年に高学年での教科化が実現されるにあたり、小学校で何を学び、それを中学校でどのように生かしていくべきなのかを考えて連携していく必要がある。そのための材料の一つとして、本研究では新学習指導要領に基づいて作成された教科書を基にして診断用英語語彙テストを開発することを目標とする。

### 3. 研究の方法

1 年目では、新学習指導要領下で使用される小学校の英語教科書を用いて、どのような語彙が使われているのか、そしてどのようなタスクが使われているのかを分析することを目標とする。まず語彙については、教科書に書かれている単語だけではなく、児童がリスニングとして耳からインプットされる単語についても分析を行うことで、児童が「耳にする語彙」と「目にする語彙」

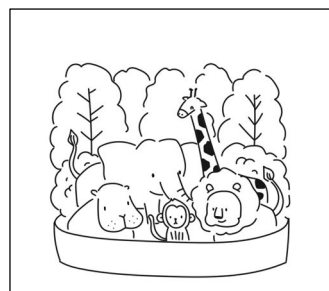
での差異を学年ごとに調査する。この際、新学習指導要領内でも指標として用いられている CEFR の vocabulary profile を用いて CEFR における語彙レベルを明らかにし、2年目の中学校教科書との比較を行えるようにする。またタスクについては Ellis (2003, pp. 217-218) に書かれたタスクの枠組みに基づき、教科書に掲載されているタスクを分類する。研究代表者と研究分担者がそれぞれのタスクを分類し、その結果を統合して不一致の点は2名で結果をすり合わせるにより、客観的な分類を行うことが可能となる。

2年目には1年目と同様の枠組みを用い、2021年度からの配布に向けて新しく作成された中学校英語教科書についても語彙とタスクの分析を行う。また、1年目にまとめた小学校教科書の分析結果と比較し、どのような語彙やタスクが連携されているのか、そして中学校で新たに現れる語彙やタスクにはどのようなものがあるのかを調査する。

3, 4年目では、1・2年目の研究に基づき、診断用英語語彙テストを作成する。小学校ならびに中学校において音声として聞く語に基づいて音声版のテストを作成し、教科書に掲載されており児童や生徒が目にする語に基づいて筆記版のテストを作成する。その際には各教科書の出現頻度、CEFRの語彙レベル等も考慮する。テスト形式は小学校を卒業したばかりの児童でも十分に慣れ親しみがあり解答しやすいような形式を、2年目のタスク研究に基づいて選出する。生徒の英語語彙力の診断を行うために、小学校で学習する単語だけではなく中学校で学習する単語も出題し、英語力が低い生徒と共に英語力が高い生徒の診断もできるよう工夫する。

#### 4. 研究成果

1年目での研究では、7冊の小学校教科書で使われている語彙を調査した。全7社で共通指定使用されている単語は全部で321語であった。また、タスクとしてはイラスト等の視覚情報と音声を結びつける活動が多いという結果であった。上記の321語の中には、a や at のような機能語が含まれている。このような語はイラストにして理解してもらうことが難しいため、テストの目標語からは除外することとした。また、2年目では中学1年生の教科書と比較し、1年目の研究で選出した語がどの程度中学校で使われているのかを調査した。小学校と中学校で重複して使用されている語がテストされる語としてふさわしいと判断し、3, 4年目の研究では最終的に69語(名詞42語、動詞18語、形容詞9語)を選出した。また、これらの69語のテスト形式については、1年目の研究成果を踏まえて、小学生がよく慣れ親しんでいる形式である、語を聞いて適するイラストを選ぶテストとした。イラストは、プロのイラストレーターにわかりやすいイラストを描いてもらい、イラストの一例は以下の通りである。それぞれ、cook, hungry, zoo を示しているイラストである。このような語彙診断テストを開発した。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 HOSHINO, Yuko	4. 巻 31
2. 論文標題 Vocabulary Range and Characteristics of Words Appearing in Elementary School English Textbooks in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annual Review of English Language Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 星野由子、清水遥
2. 発表標題 小学校英語における読むこと・書くことへの接続－検定教科書に基づく頻度分析を通して－
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会（オンライン）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清水 遥 (Shimizu Haruka) (20646905)	東北学院大学・文学部・准教授  (31302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------